

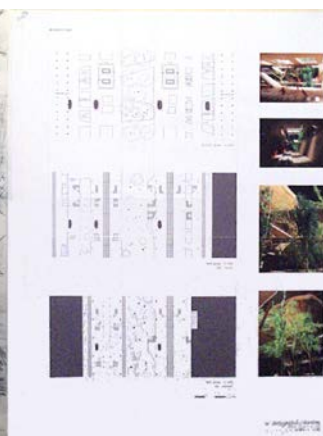
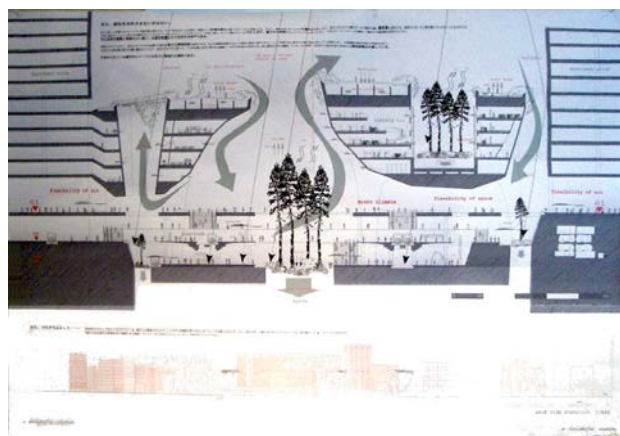
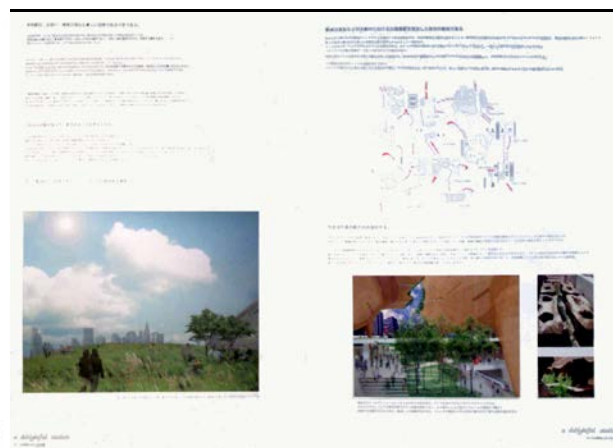
第5回 卒業設計コンクール展

最優秀賞

東京理科大学工学部建築学科
虎尾亮太

a delightful station

駅にいても楽しくて、多くの人が集まってきて、強要や束縛をしない空間。
そんな都会の駅をつくる。

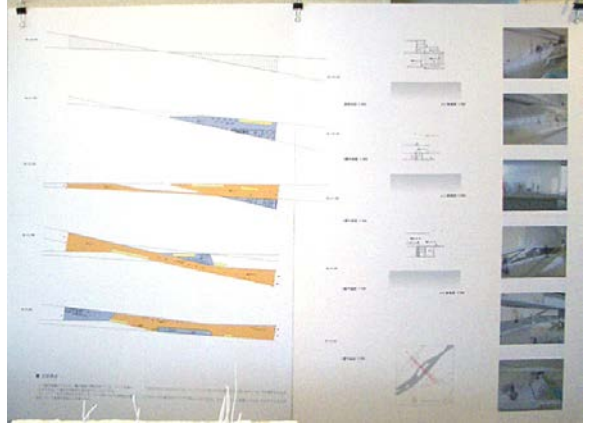
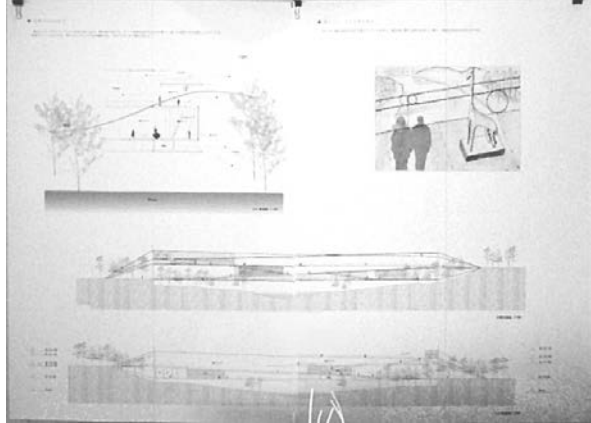
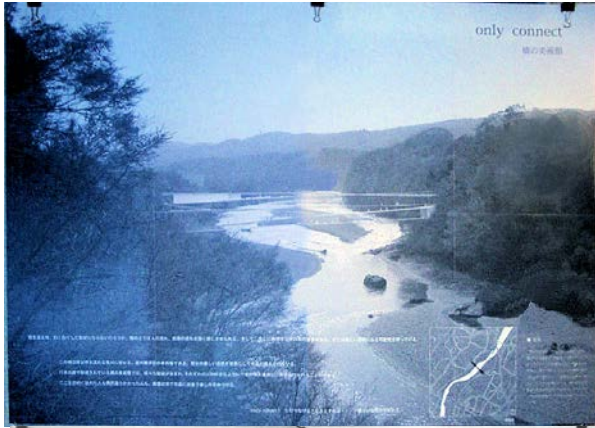


埼玉賞

東京理科大学工学部建築学科
佐藤 研也

「Only connect」橋の美術館

この橋は屋外展示型の実験的アートである。橋の上で自然を感じながら、美術品に出会うことのできる場所。普段何気なく通る橋が、そんな場になれば楽しいのではと思い設計した。

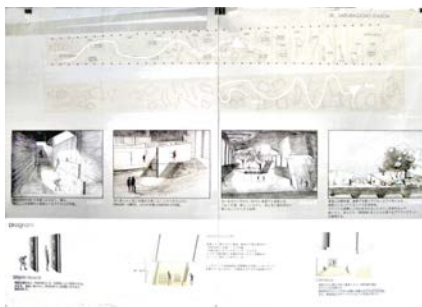


優秀賞

東京理科大学工学部建築学科
岸野亮吾

「RAKUGAKI PATH」

現在、東急東横線桜木町駅は、みなとみらい線開業に伴い、廃止となっている。
また、現在の東横線の遊歩道沿い壁面には「ART - 16.2004」という横浜市と国土交通省が試験的に地元のアーティストや美術系の学生を募り、国道16号沿いの歩道に絵を書く企画に基づきデザインされている。
しかし、いわゆる「ラクガキ」というものは、試験的により人等を限定して行われるものではなく、もっと「自由」なものであると考える。
誰しもが、どのように描いても良いものであると考える。
また、「ラクガキ」を通して文化の発祥地である桜木町に新たな文化を継承させることが可能ではないかと考えた。
そこで、本計画では「ラクガキ」を楽しみながら散歩することのできる「散歩道」を計画する。



優秀賞

日本工業大学建築学科
権田 健了

「視線が変わる川の駅」
～シーケンスを用いたランドスケープ～

台東区にある墨田公園は、浅草という観光地に位置する公園であるが、その利用頻度は低い。壁の様に立ち並ぶビル群が街と公園・川を分断していることが原因の一つとして考えられます。そこで本計画では、視線による街と公園の繋がりと、公園と川の親水性の確保を基本コンセプトとして計画しました。立体的な視線と動線のシーケンスを織り込んだランドスケープデザインを取り入れることにより、公園領域全体が緩やかな起伏で地下空間、上部デッキとリンクする、空間構成とすることが可能となります。公園は、歩くことに楽しみを持てる空間になり、新たなアクティビティが生まれます。

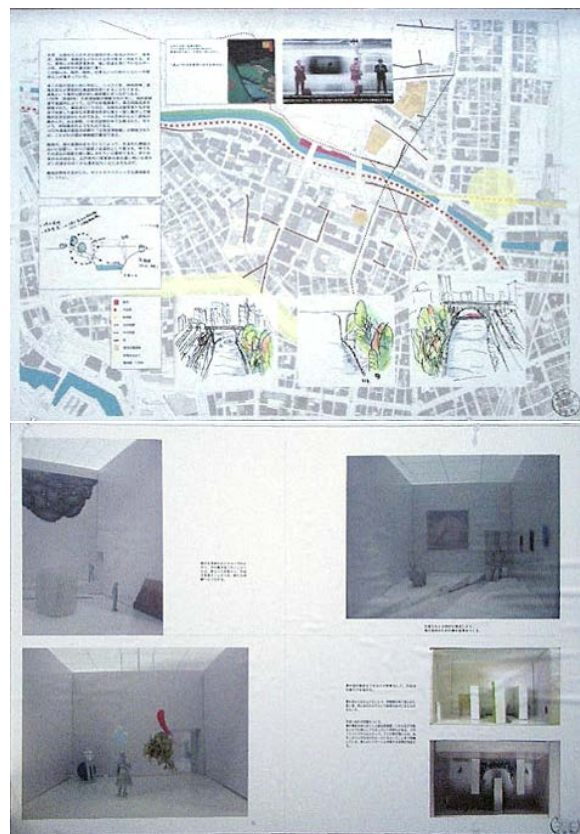
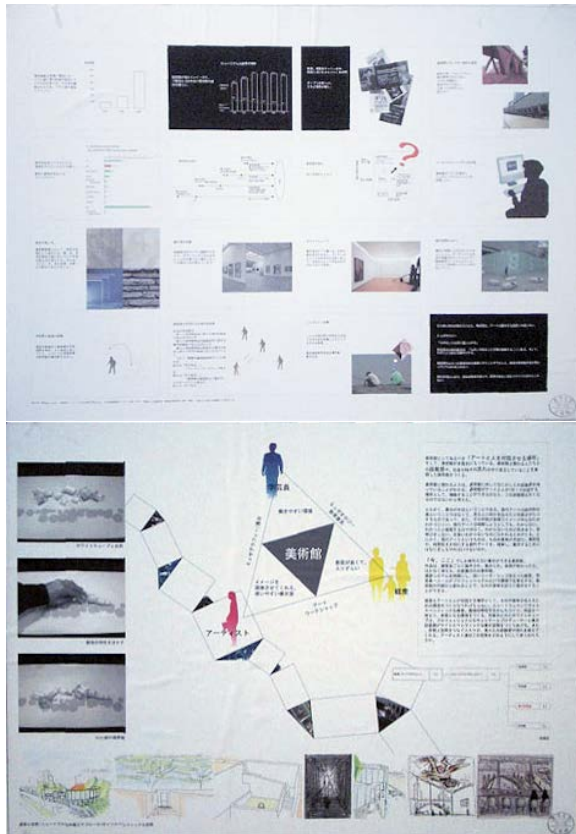


審査員特別賞

東洋大学工学部建築学科
伊代田 卓身

「美術館はどこへ。」

美術館の新築、増築のラッシュの中で閉館に追い込まれていく美術館も少なくない。また、美術館数が増えていく一方で、1館あたりの入館者数も減少しています。そのような流れの中で、美術館にどのような問題があり、どのようなことが求められているのでしょうか？美術館の本質を見直し、美術館のあるべき姿を提案しました。

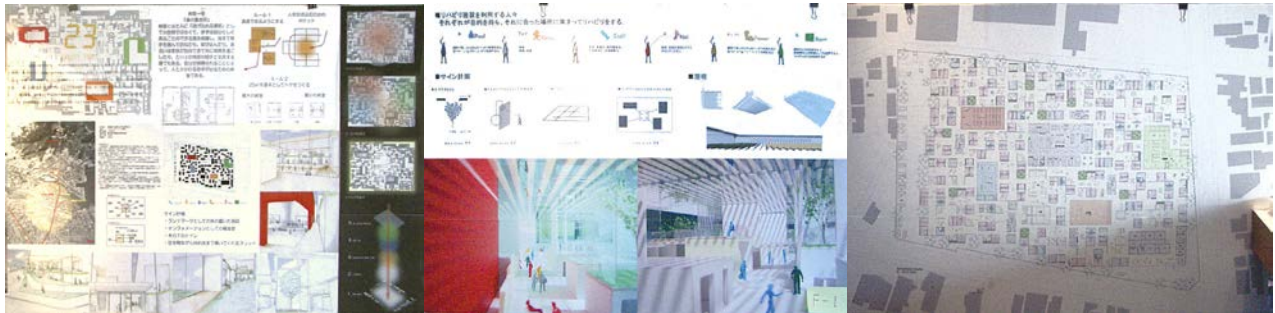


審査員特別賞

東京電機大学工学部建築学科
東根 章悟

「23 twenty three」

病院とは本来、疾病の治療だけでなく、その中で快適な生活が過ごせるように配慮されるべきはずの施設である。さまざまな施設の中で24時間生活する施設は病院以外ない。生活にもっとも関係の深いリハビリ施設を題材に、1日の内で医療行為の1時間を除いた23時間をどのように生活させるか考え提案した。ほとんどの時間を病室で生活することが多く、病院内での居場所がないことが大きな問題である。そこで、身の置き場として自分らしくあることのできる場（病室）を保障しそれ以外の生活の場を通過動線ではなかった廊下に新たな生活の場を移すことにした。そこでは、利用者によって違う出来事が起り、1人1人の自然な生活をつくり出すことを目指した。



審査員特別賞

芝浦工業大学環境システム学科
飯島 貴広

「Digital Expo」

大規模開発の根幹を成すオフィスビル高層部において、ブラックボックス化したIT企業の紡ぎ出す未来像を外部へ解き放ち、それらを日常的に体感することができる。『Digital Expo 〈人類の欲望とデジタルの調和〉』を無期限で開催することを宣告する。

